

氏 名 寺田 進志  
学位の種類 博士（コーチング学）  
学位記番号 博甲第 8298 号  
学位授与年月 平成 29年 3月 24日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
審査研究科 人間総合科学研究科  
学位論文題目 サッカー選手のパス発生に関わる身体知の構造に関する  
スポーツ運動学的研究

主 査 筑波大学教授 博士（コーチング学） 佐野 淳  
副 査 筑波大学教授 博士（コーチング学） 會田 宏  
副 査 筑波大学准教授 博士（コーチング学） 中山雅雄  
副 査 筑波大学教授 博士（人間科学） 真田 久

## 論文の内容の要旨

寺田氏の博士學位論文は、サッカー選手がゲーム状況においてパスを発生させる際にはどのような身体知を働かせているのかを、現象学的方法を核にもつスポーツ運動学の立場から明らかにしたものである。その要旨は以下のとおりである。

### （論文の問題意識と目的）

まず筆者は、「サッカーはパスゲームであり、サッカーで最も重要なことはパスである」（大淵1976）、また「パス以上に試合に決定的な影響を与えるものはない」（チャナディ1994）、さらに実際に「サッカーのゲームのほとんどは、味方へのパスに費やされている」（釜本、1995）、「パスにはサッカーのすべてが集約されている」（カー、2007）といったことを根拠としてサッカーにおけるパスの重要性について論じ、試合に勝つためにはサッカー選手はより精確にパスを発生させる能力を向上させる必要があるとして、本研究の問題意識を示している。

また、このパス発生に関わる能力研究の立場として、スポーツ運動学の立場に立つ根拠を示している。すなわち、パス発生を支える能力は「身体知」としての能力であると理解することが重要であり、そうなる身体知の現象学的理論として体系化され、動きの意味構造、価値構造の究明に寄与しうる動感を分析対象に据える今日のスポーツ運動学（金子2002）の立場から研究されることが相応しいことを論じて、本研究の立場を明確にさせている。

こうしたことを前提として、本研究では、サッカー選手がパスを発生させるために必要な（創発）身体知の構造を明らかにすることが目的とされている。

### （研究の方法）

本研究は上記したように、スポーツ運動学の立場に立ち、具体的には、「地平分析」（金子，2007，pp.66-68）の方法を採用して分析している。この地平分析の方法は、「動感深層の地平構造のもつ志向体験に問いかけ」（金子，2007，p.247）、「動感力の含意潜在態を背景に隠している地平志向構造を明るみに出」（金子，2007，p.261）そうとする方法である。著者はこの地平分析によって〈パスができる〉、すなわちパス発生に関わる身体知を明らかにしようと試みている。

#### （論文の概要）

本論の全体は四部から構成されている。第Ⅰ部では、サッカー選手の動感特性が明らかにされている。サッカーの競技規則には「ボールを蹴らなければならない」といった規則は存在しないが、サッカー選手は当然のごとくボールを蹴っている。ゴール型の種目に位置づけられ、手または腕の使用が禁止されるサッカーでは、得点を取るためにボールを蹴ることが極めて有効になるからである。こうしてボールを保持した際には、サッカー選手は必ずボールを蹴る運動形態の発生が必要になる。このボールを蹴る動きは自動化されていて、いわば潜在的な意識の働きによってボールを蹴る運動形態を発生させている。こうしたことを根拠に、筆者はサッカー選手の動感特性は潜在的な動感意識によって生じるボールを蹴る動感であることを明らかにしている。

第Ⅱ部では、指導目標像としてのパスが明確にされている。一般に、パスは蹴り方（技術）と判断（戦術）によって成り立つと考えられているといえるが、「パス＝蹴り方＋判断」といった図式では自然科学的立場からパスの要素が抽出されたただけであり、指導目標像としてのパスが明確にされているとはいえない。そこで筆者は、パス練習における選手の動感の特徴とパス指導における指導者のねらいを考察して、状況において各選手にふさわしいボールを味方につなぐという課題を達成させるための方法、すなわち、ボールを味方につなぐための運動形態の発生の方法こそが指導目標像としてのパスであることを明確にした。

第Ⅲ部では、パスの発生契機が分類されている。筆者は出し手の動感に基づいて、パスの発生契機を四つに分類している。すなわち、出し手優位、受け手優位、出し手と受け手の動感の合致、敵優位の四つに分類し、それぞれの特徴を明らかにしている。なお、これらは極性原理に支配されていて、どれか一つの影響を受けてパスが発生するのではなく、出し手はいずれの影響を受けつつも最も強い影響を感じた要因をきっかけにしてパスを発生させることを示している。

第Ⅳ部では、それまでの内容を前提として、本研究の目的であるサッカー選手の〈パスの知〉の構造を明らかにしている。分析の結果、まずサッカー選手に不可欠な根源的な〈知〉が明らかにされた。すなわち他者の〈知〉を感じる能力と自己の〈知〉を感じる能力の存在が明らかにされた。そしてこの根源的な知をベースとしてパスに関わる多くの能力（身体知）が明らかにされた。すなわち、パスの創発身体知として、出し手の体感身体知における空間的的定位感能力としてピッチ上の〈ここ〉を感じる能力や他者関係系における〈ここ〉を感じる能力、方向との関わりのなかで〈ここ〉を感じる能力、時間的的定位感能力として〈絶対的今〉を感じる能力、また空間的遠近感能力としてボールとの遠近を感じる能力、他者との遠近を感じる能力、時間的遠近感能力として好機までの近さを感じる能力、そして気配感能力では状況から気配を感じる能力が明らかにされた。そして、これらの創発身体知の構造解明の後で、〈パスの知〉における戦術力と技術力が明らかにされるとともに、最終的に、ゲームないし実践におけるパスを発生させることに関わる知の全体構造を明らかにしている。

## 審査の結果の要旨

#### （批評）

寺田氏の本博士論文では、スポーツ運動学の立場から地平分析と呼ばれる分析方法が用いられ、サッカーにおいて重要なプレーであるパス行為がどのような身体知に支えられて出てくるのかが、意識の深層構造に焦点を当てて分析された。分析の結果明らかにされた、まずパスの4つの発生契機はパスの出し手と受け手の動感の合致に向けた効果的なパス指導の視点を提供していること、そしてボールを味方につなぐといった課題を達成させるための〈パスの知〉の構造を明らかにしたことは、選手個人の〈パスの知〉の評価視点を示し、指導者が選手に対して行う〈パス〉の促発指導

のための有用な手がかりを提供したことは高く評価できる。球技スポーツの運動問題を現象学的方法を核としたスポーツ運動学の立場から追究した本博士論文は、球技スポーツの現場的視点からの運動研究の更なる深まりを期待させるものである。

平成 29 年 1 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。